アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

―アリス・ギア・アイギス外伝―

第三話「実感」

《アクトレスの優陽と民間人のみちるの出会いのシーン》

◆澪音の部屋

澪音　「……みちるは今年入部したばかり。初めて演技するのに、ラストシーンからの撮影は難易度高すぎるよね」

勉強机に座り直し、もう一度優陽が書いた脚本を読み返す澪音。
単純なシナリオ構成ではあるが、一つだけ大きな伏線を張っている。
余程脚本を読み込んでいないと、演者が適切な感情を込めるのは難しそうだ。

澪音　「うん。素直に台本順に撮影した方が良さそう」

澪音は数ページしか残っていない使い込んだノートを広げた。

澪音　「撮影スケジュールを決めないと」

1ページを1ヶ月に見立て、撮影スケジュールを書き入れていく。
大ざっぱに箇条書きしてから、少し細かい内容を加えていった。

澪音　「大体、こんな感じよね。うん。これなら間に合うかな？」

満足げにノートを見直すが、ちらっと時計に視線を移すと一瞬にして青ざめた。

澪音　「ウソ、もうこんな時間！？」

気がつくとノートを広げてから3時間が経過していた。
普段ならもうとっくに眠っている時間だ。

澪音　「もう寝ないと、明日に響いちゃう……優陽のこと笑ってられない

わ！」

ノートを閉じて席を立つ。

しばらくそのまま直立していたが、やがて思い直しイスに座り直す澪音。

澪音　「……やっぱりこのままじゃ気持ちが悪いわ。やれるところまでやらないと」

澪音はＰＣを立ち上げ、表計算ソフトのアイコンをクリックした。

◆映画研究部部室

泰介　「うぉ。マジで10月の文化祭までに完成させるつもりなのか！？」

プリントアウトされたスケジュール表を見て、泰介が声をあげた。

澪音　「もちろん。せっかくいいホンになったんだから、みんなに見てもらわないとね！」

泰介が予想通りの反応をしてくれたおかげで、壇上に立っていた澪音は自信を持ってスケジュールの説明を始めた。

澪音　「文化祭での公開を目指します。少し……ううん、かなりタイトなスケジュールだから、みんなの協力が不可欠なの」

奥井　「正直に言わせてもらうと、この期間で美術関係の道具を作るのは厳しいね。特にヴァイスの形状とか、あまり凝ったモノは用意できないと思って欲しいかな」

澪音　「奥井君と泰介に負担を掛けるのは分かってる。だからこそ、無理なこ

澪音は真剣な表情で奥井を見つめた。
奥井はカメラに映ることを好まない反面、裏方として要となる働きをする。
奥井が無理と言えば、撮影は実質不可能となる。

泰介　「まぁ、ぶっちゃけムリ……」
奥井　「無理、とは言いたくないかなぁ。なぜなら、ボクもこのホン、大好きだからね」
優陽　「奥井君……」
泰介　「さすが奥井先輩！　パネェっす！」
調　「相変わらず調子いいな、泰介」

部室内の空気が弛緩する。
澪音はこれで映画完成までの見通しが立ってホッとしていた。

だが……

みちる　「……」

みちるは誰よりも後ろの席で、今にも泣きそうな顔でスケジュール表を眺めていた。

優陽　「みちるちゃん？」

そんなみちるに一番初めに気がついたのは優陽だった。

みちる　「あ……」

急に名前を呼ばれて反射的に顔をあげるみちる。
すると部員の視線がみちるに集中していることに気がつき、余計にみち

るの恐怖心を増長させた。

澪音　「怖い？」

澪音はみちるを安心させるため、笑顔で話しかけた。

みちる　「あ、いえ……」

しかし否定の言葉とは裏腹にみちるは視線を落とし、その表情は硬まっていた。

優陽　「スケジュールが決まると、実感が沸いてくるもんね」

みちるから少し離れて座っていた優陽は、立ち上がってみちるの隣の席に移動した。

優陽　「みちるちゃんはメインキャストだし、怖くて当然だよ」

まるで姉が妹をなだめるように、みちるの肩を抱き寄せる優陽。

それでもみちるの表情は晴れない。

優陽　「始めから上手な人なんていないんだからさ、まずは自分のやれる範囲でやってみようよ。ね、監督？」

優陽はみちるを慰めつつ、澪音に同意を求めた。

澪音　「そう。最初はむしろ硬くって良いんだよ。その分、最後にはとびっきりの笑顔を浮かべてくれればいい。それが映像にリアリティを持たせるからさ」

調　「うわー、カッコいいな、澪音！」

澪音　「うっさい、しべー！」

調はわざと茶々を入れて場を和ませようと試みた。

それが分かっていたから澪音は苦笑いを浮かべながら対応したのだが……

みちる　「……」

それでもみちるの不安が晴れることはなかった。

◆学校の裏山

みちる　「はぁ……はぁ……はぁ……」

空はどんよりと曇り、普段よりも暗い森の中をみちるが走っていた。

時々後ろを見ている様子から、何かに追われていることが分かる。

みちる　「きゃっ！！」

みちるは両手を頭にのせてうずくまり、悲鳴をあげた。

澪音　「カット！！」

澪音の声が辺りに響き渡る。

みちる　「はぁ……はぁ……」

息を切らせながらゆっくりと立ち上がるみちる。

そのみちるに向かって、澪音は少し離れた位置から大げさな身振り手振りを加えて説明を始めた。

澪音　「みちる！　もっと大きな声出すの！」
みちる　「は、はい……」
澪音　「ヴァイスに襲われるシーンなんだよ！？　死んじゃうんだよ！！」
泰介　「いや、死なねぇだろ？　このあと、アクトレスに助けられるんだから」

端で見ていた泰介がいつもの茶々を入れる。

澪音　「うっさい！　それは台本でしょ！　リアルだったら殺されるかもしれないでしょ！　そのつもりで演技しないでどうするの！！」

持っていたメガフォンを泰介にビシッと向け怒鳴りつける澪音。

泰介　「おーこわ」

泰介は大して怖がる様子も無く、コメディドラマに出演したアメリカ人のように両手を広げてみせた。

澪音　「とにかくみちる！　もっと声を出して！　もっと怖がって！」
みちる　「……は、はい」
優陽　「カメラに向かっての演技だから難しいよね？」

アクトレス役で待機していた優陽がみちるの側に駆け寄り、慰める。

みちる　「難しいけど……やらないとダメだから……」
優陽　「うん、頑張って」

優陽がみちるの側から離れると、再び少し離れた位置から澪音が指示を出した。

澪音　「みちる！　カメラをヴァイスだと思うの！　カメラから手足が生えて、襲われるって思うくらいの方がいいわ。できる！？」

みちる　「は、はい！」

澪音　「それじゃあ、準備して！」

そのかけ声で、各スタッフはスタート地点へと移動する。

調　「それじゃあ、いい？　シーン2、テイク3……」

助監督の調がカチンコを構え、カメラマン役の奥井が録画ボタンを押す。

澪音　「アクション！」

調がカチンコを鳴らし、みちるがカメラに向かって再び走る。

みちる　「はぁ……はぁ……はぁ……」

左右を気にしながら走るみちる。

しばらくして、澪音が上げていた腕を振り落とした。

それがヴァイスが襲ってきた合図だった。

みちる　「きゃあぁぁ！」

みちるはうずくまりながら、できる限りの悲鳴をあげた。

澪音　「カット！」

みちる　「えっ！？」

澪音　「足りない！　もっともっと怖がって！！」

みちる　「は、はい……」

泰介　「……ったく、何度NG出せばいいんだよ」

みちる　「ううっ……ごめんなさい……」

渾身の演技でもダメだしをくらい、みちるはどうして良いのか分からなくなり始めていた。

澪音　「泰介！　最初のシーンは映画の印象を決める重要なシーンなんだよ！文句言うだけなら帰れ！」

メガフォンを持った手を帰り道の方にビシッと向ける。

その目は本気だった。

泰介　「……おーこわ」

さすがの泰介も、今度は背筋を伸ばさずにはいられなかった。

優陽　「……鬼だね（こそこそ）」

調　「メガホンを持つと人が変わるな（こそこそ）」

澪音　「そこの二人も帰りたいのっ！？」

澪音はメガフォンを口に当て、内緒話をしている二人に向けた。

優陽　「い、いえっ！？」

調　「滅相もございません！」

澪音　「それじゃあ、テイク４の準備をして！」

再び各スタッフがスタート地点へと移動する。

再び優陽がみちるの横につき、一緒に走りながらアドバイスした。

優陽　「大丈夫。ちゃんとできてるよ！」

みちる　「……」

優陽の励ましの言葉はみちるに届いていなかった。

優陽　「……みちるちゃん？」

みちる　「……ねぇ、優陽ちゃん」

優陽　「な、なに？」

みちるは小学生の時の様に、優陽「ちゃん」と呼んでいた。

優陽はその刹那、嫌な予感がした。

みちる　「……私、映研にいていいのかな？」

優陽　「え……？」

みちるの言葉はまるで「映研を辞めたい」と言っているように思えた。

優陽　「もちろんだよっ！　あたしはみちるちゃんと一緒に映画作りたいもん！」

優陽は咄嗟にみちるの表情が撮影部隊にバレないように体を二者の間に割り込ませた。

そして優陽は必死にみちるを励ました。

二人の間だけで完結するよう、限界まで声量を絞りながら。

その一方で澪音と調も、周りに聞こえない声量で現状について話し合っていた。

調　「……マズイね」

澪音　「分かってる。だけど今は優陽に任せるしかない」

調　「あぁ。頼むよ、優陽」

二人は演者の成り行きを見守っていた。

優陽　「澪音ちゃん、怖い？」

みちる　「うん……あ、いえ、そんなことは……」

みちるは背筋を伸ばし、「先輩」に話す言葉に切り替えた。

優陽は言葉を換える必要は無いよと言いたかったが、今はむしろ少しだけ冷静さを取り戻しみちると本題を話す方が重要だと思い直す。

優陽　「ううん、あれは鬼だよ。だからね、澪音ちゃんをヴァイスと思って演技すればいいんだよ。怖いよね？」

優陽は澪音の方に視線を向けながら、頭の横に両手の人差し指を立てた。

みちる　「えっ！？　……クスっ」

ようやくみちるにほんの少しだけ笑みが戻った。

優陽　「結構効くと思うから、やってみて」

みちる　「う、うん。ありがとう、優陽ちゃん」

優陽は笑いながら、みちるから離れていく。

みちるは少しだけ目を瞑り、イメージを整えた。

調　「それじゃあ再び！　シーン2、テイク4……」

澪音　「……アクション！」

結局、オッケーが出たのはテイク7だった。

◆霞ヶ浦

澪音　「……カット！」

今日の撮影は霞ヶ浦。
アクトレスの優陽と歌手を夢見るみちるが交流をするシーンだった。

澪音　「……うん、良いかな」

動画のチェックを終え、シーンはＯＫとなった。

調　「澪音。陽も落ちてきたし、今日はこの辺にしとく？」

澪音　「そうだね。若干圧し気味だけど、今日はここまでにしようか」

監督の言葉を聞いた一同は、一斉に片付けを始めた。

みちる　「そ、それじゃあ、お先に失礼します！」

そそくさと帰り支度を終えたみちるは、誰よりも早くその場を立ち去ってしまう。

優陽　「あ、みちるちゃん！　今日は少し遅くなったし、一緒に帰ろうよ！」

優陽の言葉が届かなかったのか、みちるは振り返ること無く姿を消してしまった。

◆帰宅路

優陽　「みちるちゃん、今日も先に帰っちゃったし……一緒に帰りたかったん

だけどなぁ」

優陽は何気なく放った一言だったが、その言葉は監督である澪音に重くのしかかっていた。

澪音「……優陽。帰ったらみちるのフォロー、頼めるかな？」

優陽「もちろん、そのつもりだよ？　台本の読み合わせもするつもりだし」

澪音「……あ～っ！　なんでもっと気を遣えなかったんだろ……自己嫌悪」

頭をくしゃくしゃとかきむしる澪音。

調「撮影中は見事な鬼監督だからね」

澪音「うう……良い画を撮ることに気を取られて、みちるのフォローしきれなかったのは確か」

調「まぁ、みちるもその辺りは分かってると思うよ？」

優陽「うん、あたしもそう思う。それよりもっと根っこの部分ですれ違いがあるんじゃないかなぁ？」

調「……だね」

優陽「小学生の時はよく一緒に遊んだんだけどね。あたしが中学生になってから、変な距離できちゃったっていうか……」

調「まぁ、物理的に通う場所が変わったわけだし。それが2年も続けば仕方ないよ」

優陽「そうだけどさ、あたし達のこと変に先輩だって意識しちゃってるよね、みちるちゃん？」

澪音「う～、やっぱり最初から厳しく行き過ぎちゃったかなぁ……」

はぁ、と深いため息をつく澪音。

澪音「もう少し優しく演技指導すべきだったよね？」

調「いや、澪音はそれでいいんだよ。監督までなぁなぁになったら、気持

ち悪い映画にしかならない」

三人の中で一番大人びた調が説得力のある言葉で慰める。

優陽　「そうそう。だからみちるちゃんのフォローはあたしに任せといて、澪音ちゃん」

澪音　「う、うん……頼んだよ、優陽」

澪音はすがるような目で優陽を見た。

優陽はそんな澪音を安心させるためにガッツポーズで応えた。

◆みちるの家

優陽が真島家の玄関の扉を少し開けると、そこにみちるの母の姿が見えた。

優陽　「おばさん、今晩は」

みちる母　「あら、優陽ちゃん。みちるに用事？」

優陽　「はい！　みちるちゃん、います？」

みちる母　「いるわよ。呼んでこようか？」

優陽　「あ、あたしが行きます！」

優陽とみちるは互いに一人っ子だが、隣同士の稲葉家と真島家では姉妹のような存在だと認識していた。

だから基本的に互いの敷居をまたぐのはフリーパスだったし、今のように少し遅い時間でも全く問題なかった。

優陽は慣れた階段を上がっていくと、みちるの部屋をトントンとノックした。

優陽　「みちるちゃん！」
みちる　「え、優陽ちゃん？」

扉の外から聞こえてきた優陽の声に驚くみちる。
優陽はみちるの部屋の扉を少しだけ開けて、隙間から顔を覗かせた。

優陽　「あ、ゴメン。もしかして勉強してた？」
みちる　「ううん、大丈夫」

みちるは扉を大きく開き、優陽を部屋に招き入れた。
優陽は指定席のクッションにポンと座ると、前のめりになって本題に入る。

優陽　「あのさ、みちるちゃん。やっぱり部活、つらい？」
みちる　「ううん！　つらいって言うより、みんなに迷惑かけるのが悪くて……」

みちるはベッドに腰掛け、両手を膝の上にちょこんと重ねた。

優陽　「迷惑だなんて思ってないよ？　澪音ちゃんも怖く見えるけど、みちるちゃんにつらい思いさせてるのがつらいって言ってるし」
みちる　「……それがつらくて」
優陽　「あはは。まるでお互いにつらいのループだね！」
みちる　「……」

みちるは俯いて黙ってしまう。
優陽はそんなみちるを2年前の自分に重ねていた。

優陽　「あたしもね、最初は全然演技できなくてさ。志保ちゃんによく怒られたんだ」

松本志保はみちるからみれば三歳上のお姉さん。
今は土浦の高校に通っており、寮に入っているため顔を合わせることはほとんどない。
だけどここから徒歩1分も掛からないところに実家があるため、子供の頃はよく三人で遊んでいた。

優陽　「だから最初からうまく演技されちゃうとね、むしろあたしがダメダメってことになっちゃうから、少しずつできるようになって欲しいんだ」

みちるには優陽が自分を気遣ってくれていることが痛いほど分かっていた。
だけどウソが吐けない優陽は、その言葉が本当の気持ちだということも理解していた。

優陽　「一つ、聞いていい？」

みちる　「うん、なに？」

優陽　「みちるちゃん、どうして映研に入ったの？」

みちる　「それは……」

みちるは俯いて黙ってしまう。

優陽　「ゴメン、やっぱいいや」

理由を語るのを躊躇うみちるを見て、優陽は少しイジワルをしてしまったと思った。
なぜなら、みちるが映研に入った理由をなんとなく分かっていたからだ。

優陽　「みちるちゃん。澪音ちゃんや調ちゃんもいるんだから、昔みたいに遊ぶ感覚でやっていこうよ！」

そう。
みちるは小学生の時のように、またみんなで遊びたかっただけだ。

みちる　「……うん」

みちるの表情が少しだけ緩くなった
だけどその表情はいつものみちるの笑顔とはほど遠かった。
みちるにとって映研というハードルは想像以上に高く、特に引っ込み思案な自分が演技をする違和感を全く拭えずにいた。

優陽　（これ以上はかえってプレッシャーかけちゃうかな？）

優陽はゆっくりと腰をあげる。

優陽　「困ったことがあったら、何でも言ってね、みちるちゃん」

みちる　「うん。ありがとう、優陽ちゃん」

優陽は手をヒラヒラと振りながら、みちるの部屋を後にした。

◆ショッピングセンター

今日は日曜日。
外はカラリと晴れて撮影日和ではあったが、奥井達がじっくりと小道具関係を作りたいというので、撮影は休みとなった。
それならと優陽は三人を誘い、自宅から少し離れたところにあるショッピングセンターにやってきた。
特に買い物をしたいわけでもないのにわざわざやって来たのには理由があった。

優陽　「ほら、見てー！　やってるよ！」

ワクワクした気持ちを抑えながら、澪音や調よりも数歩前を歩く優陽。目的の場所を見つけると、指を差して笑顔を弾けさせた。

澪音　「へー、ほんとにやってるね。アクトレスの適正検査」

調　「ここでやっているのは簡易的な検査だけどな。適性アリとなると専門機関で正式なエミッション検査を受けられるらしい」

ショッピングセンター内のイベントスペースに設けられたアクトレス適正検査場。

そこに目立つように立てかけられていた看板を見ながら調が応えた。

優陽　「それにね、アクトレス事務所と契約もできるんだって！」

両手でガッツポーズをとりながらやる気満々の優陽。

調　「あくまで仮契約だけどな。試験を受けてアクトレス免許を取って、ようやく正式な契約にアップデートだから」

優陽　「大丈夫！　絶対にアクトレス免許、取るもん！」

あまりにもやる気満々の優陽に対して、澪音は少し心配な表情を浮かべた。

澪音　「まさか、本当にアクトレス事務所と契約するつもりじゃないよね、優陽！？」

優陽　「えへへ、どうしようかなぁ……」

頭の後ろを撫でながら、優陽はわざと悩む仕草をした。

優陽「澪音ちゃん、しべちゃんもやるでしょ？」

澪音「えー、どうしようかなぁ……」

澪音の心情は複雑だった。

今まで優陽がアクトレスになるといっても、所詮は仮定の話だった。

だけど今、現実にアクトレスになるための第一歩を踏み出そうとしている。

このままだと親友が本当にアクトレスになってしまい、自分の手の届かないところに行ってしまうような気がした。

調「まぁ、アクトレスになるつもりは今のところないけど、無料でやれるならやってみてもいいかな」

澪音「えっ、そうなの！？」

調も自分と同じ気持ちで適性検査を受けることはないと思っていただけに、澪音は少しだけ裏切られた気持ちだった。

優陽「だよね！　澪音ちゃんはどうする？」

澪音「うーん、しべもやるならやってみようかな……」

ここで断るとその場が白けてしまうと思い、澪音は渋々ながら自分も適性検査を受けることにした。

優陽「決まりだね！　すみませーん！！」

優陽は勢いよく検査場へ駆けていく。

その様子はまるで親からオモチャを買ってもらえる小学生のようだった。

調「ありゃあ、本気で今日中に事務所と契約するつもりだね、あの娘」

澪音「……」

調　「……心配？」

澪音　「心配、って言うかさ……」

優陽に残された二人はゆっくりと歩を進める。

澪音　「アクトレスの事務所って、一番近いところで土浦でしょ？　中学通いながらじゃ、実質、無理だよね？」

調　「まあね。だから今すぐの話じゃない。だけど高校受験に向けて優陽のやる気に繋がるなら、付き合うのも良いかなって思うけど」

澪音　「あー、なるほど。しべはそのつもりだったのかぁ」

優陽は澪音や調と比較すると、成績は少し劣っていた。

だから受験勉強を優陽に頑張ってもらわないと三人が同じ土浦の高校に通うことは難しい状況だった。

澪音　「それならわたしも積極的に付き合うよ」

既に優陽は用意された席に座り、書類に名前や住所を記載していた。

二人も優陽に続き、渡された書類に必要事項を書き入れた。

そして簡単な説明を聞いた後、三人は検査を受けた。

係員Ａ　「それではこちらを被ってもらえますか？」

優陽　「はい！」

簡易脳波計のようなヘッドギアを受け取り、頭に被る優陽。

調　「適性が出るのって、どのくらいの確率なんですか？」

優陽が検査に夢中になっている傍ら、調は優陽に聞こえないように近くの係員に尋ねた。

係員B　「大体1割もあれば良い方ですね」
調　「えっ！？　そんなに少ないんですか！？」
係員B　「エミッション能力を持つ女性は多いんですけど、アクトレスとして活躍するだけのものとなると、そのくらいになってしまうんですよ」

意外な事実に、調は驚きを隠せなかった。

調　（恐らく優陽はこの事実を知らない）

普段から東京シャードに行けばアクトレスになれると信じていた優陽。それだけに優陽からアクトレス検査についての話など、調は聞いたことがなかった。

調　（今から慰める方法を考えておくか……）

調は人知れず苦笑いを浮かべていた。

澪音　「結果が出るまで30分くらいだって。このあとどうする？」
優陽　「それならチョコバナナクレープ食べたい！」
調　「言うと思った。それじゃフードコートに行こうか」
澪音　「そうだね。わたしは何食べようかな？」
調　「私はコーヒーだけでいいや」
澪音　「えっ！？　しべ、ダイエット中！？」
調　「いや、そんなつもりはないけど？」

調は否定したが、モデルのようにスラッとした調の体型を見て澪音は思い直した。

澪音　「わ、わたしもコーヒーだけにしようかな……」

優陽　「あたしは食べるけどね！」
澪音・調　（（食べても太らない体質、羨ましい……））

結局我慢できず、澪音も苺クレープを購入。
大きな口でクレープを食べる優陽を眺めながら、フードコートでくつろぐ三人。
そして30分が経過し、検査場へ向かった。

優陽　「すみませーん！　さっき検査を受けた稲葉ですけどー！」

溢れる笑顔を隠せない優陽に釣られるように係員も笑顔を浮かべる。

係員　「あちらで結果を受け取ってください」
優陽　「ありがとうございます！」

指示された場所で、三人は個人情報保護のために圧着された葉書のようなものを受け取ると、他人の迷惑にならないように人通りのない柱の陰に移動した。

優陽　「それじゃあ、せーので開けるよ！」

内緒話のように顔を近づけ、圧着紙を剥がすために隅っこをつまむ三人。

三人　「「「せーの！」」」

一斉にペッと圧着紙を剥がした。

澪音　「えっ！？　適正アリ！？」

最初に声をあげたのは澪音。

調　「私もアリだ」

それに続く調。

澪音　「優陽は……？」

澪音と調の視線は優陽に注がれる。

優陽　「……」

澪音・調　「「あ……」」

二人は優陽の結果が目に入って、思わず声にならない声を漏らす。

優陽　「……あたし……ダメ、みたい……」

優陽は顔を上げ、今にも泣きそうな笑顔を浮かべた。

澪音・調　「「……」」

優陽　「……あはは」

弱々しく笑う優陽。

そんな優陽になんて声を掛けて良いのか分からない二人。

優陽　「そっかー、あたし、適正ないのかー、あはは」

澪音　「優……陽……」

調　「さっき係の人から聞いていたんだけどな、アクトレスの適性があるのは1割も満たないらしいんだ。別に悲観する事じゃない」

調は咄嗟に慰めたつもりだったが、口にしてすぐにそれが慰めになって

いないことに気がついた。
普段冷静な調も動揺していた。
少ない確率の中、自分に適性が出てしまったことに。
そして、よりによって優陽にだけ適正がなかったことに。

優陽　「凄いじゃん、二人とも！　良かったね、アクトレスになれるんだよ！」
澪音　「……」

澪音は完全に言葉を失っていた。
何を言っても優陽を傷つけると思っていたからだ。

調　「……まぁ、私は最初からアクトレスになるつもりはなかったけどね。無料でやれたからやっただけだし」
澪音　「わ、わたしもそうだよ。始めからアクトレスになるって思ってないしさ」

優陽　「……二人とも、あたしに気を遣わなくてもいいんだよ？　アクトレスって時給も悪くないらしいし、高校生になったらバイトするのもいいんじゃない？」

時々つまりながら、無理やり言葉を紡いでいるようだった。

調　「まぁ、どちらにしろ高校生になってから考えることだね」

澪音　「……」

優陽　「……」

調は極力冷静に振る舞った。

しかしほんの少しだけ声が震えていることを隠すことはできなかった。

調　「取りあえず、目的は果たしたし、帰ろうか？」

優陽　「……うん、そうだね」

澪音　「……」

帰り道。

三人はほとんど会話を交わさなかった。

◆優陽の部屋

ショッピングセンターから帰ってきた優陽。

陽も暮れて部屋は暗いが、明かりを付ける気力はなかった。

優陽　「……」

ふと目の前に、部屋中に溢れているアクトレスのグッズが目に入った。

マグカップ、シャープペンシルといったノベルティグッズを始め、雑誌

やクッション。
そして使い古したペンケースには、とあるアクトレスのシールが貼られていた。
そのアクトレスはそんなに有名なアクトレスではなかったが、優陽にとっては特別なアクトレスだった。

優陽　「……ううっ」

そのアクトレスのシールを見て、優陽の目の前が突然涙でぼやけた。
悲しみと悔しさが溢れかえってきた優陽は、咄嗟にペンケースを掴み振り上げた。

優陽　「ううっ……こんなのっ!!」

【選択】　優陽がとった行動は？
《A　ペンケースを投げつける》
《B　ペンケースを投げるのを堪える》